揺れながら育つ心に寄り添う

園長　野中　泉

ご存知の方もいるかもしれませんが、「発達の扉」という著書で知られる白石正久さんという教育学者がいます。その白石さんの講演を昨年お聞きする機会があったのですが、その時に発達について言われた言葉を、昨日久しぶりに思い出しました。それは、こんな言葉でした。

「発達は「こうなりたい自分」という願いから始まります。「お兄ちゃんみたいになりたい」。「友だちのように自分もしてみたい」。でも同時にそれは、「今はそうではない自分」と「なりたい自分」の矛盾に向き合うことでもあるのです。だとすると、発達は矛盾を乗り越えることとも言えます。矛盾を乗り越えるには、大きな力と勇気が必要です。だから、その時に周囲の人の支えや励ましが必要なのです。」

この原稿を書いている前日は、４・５歳児の「アトムフェス（運動会）」の３回目の予行練習でした。予行を全部私が見たのは、これが初めてだったのですが、予行どころか、そもそも、これまでのアトムフェスを一度も見たことがない新米園長の私は、いわゆる「ふつうの」運動会のイメージとの違いに、モゾモゾとお尻が落ち着かない気持ちになりました。もっと、正直に言えば、大人が期待する華やかさや、わかりやすい盛り上がりがちっとも現れないことへの心配も押し寄せてきます。でも、戸惑う私をよそに、何年もアトムフェスで子どもたちに寄り添ってきた担任のベテラン保育士たちは、落ち着いて、そして本当に楽しそうに、急に予定と違うことをやりたがったり、逆にやらなかったりする子どもたちに、ひとつずつ「何回とびたいの？」「じゃあ、一緒にやるか」と丁寧に尋ねながら予行を進めていきます。クラスの担任だけでなく、汗だくでそれをサポートしてくれている大道具係の保育士たちも「まだ、まだ本番まで変更あるな」と当たり前のように、子どもたちの速度につきあう覚悟なのです。

予行が終わった後、今更ですが「アトムフェスで大事にしていることは何？」となおちゃん（福島保育士）きょんちゃん（大野保育士）に尋ねました。ふたりは口をそろえて「子どもが自己決定していける姿」と言い「これがやりたい！だけでなく今日はやりたくないということも含め、自分が決めて、それを安心して表明できる場であること」ときょんちゃん（大野）が重ねて教えてくれるのを聞きながら、私はさっき見た子どもたちの顔を思い出します。大人が想像する、わかりやすい「がんばっている顔」だけでなく、ひたすら「ニコニコ」嬉しそうだった顔、躊躇したり困っていたような顔、少し不機嫌そうに見えた顔、とても誇らしげだった顔など、子どもたちが予行で見せてくれた表情が実に自由で様々だったことに気がつきます。

「やりたい」があるのと同じくらい「やりたくない」「できない」がある。でも「やりたくない」の内面にも見え隠れする切実な「やりたい」という願い。子どもたちが見せてくれたいろんな顔の向こう側には、複雑に揺れ動く子どもたちの心が見えていたことに、今更のように私は思いあたります。そして、この揺れる心をしっかり受け止め、そして丁寧に寄り添い応援してくれている大人たちとのこの毎日こそが、もうフェスの真っ最中なんだと気づくのです。

10 月 19 日は、お父さん、お母さん、地域の人達と一緒に、そんな子どもたちの積み重ねてきた時間にも思いを馳せながら、子どもたちの『今』をしっかり受け止めたい。そう楽しみにしています。